

編集後記

『事業承継 Vol.4』をお届けします。今号より学会独自の編集・出版となりました。今号も様々な角度から事業承継問題に切り込む、力作が並んでおります。

今号におきましては、特別寄稿論文という形で、林廣茂代表理事の論文「日本の経営哲学の系譜—不易流行性・経路依存性・時代性—」が掲載されており、日本の経営哲学の系譜をたどりながら、日本文化の根底にある宗教観や倫理道德との関連性を読み解いていくという非常にダイナミックな内容となっています。現代における事業承継を考えるに当たってもこのような歴史的背景の読解作業は非常に重要な意味をもつと考えます。

統計データから日本人は無宗教であるとよく言われます。はたして本当にそうなのでしょう？多くの日本人は宮参りや七五三、成人式、結婚式、葬式等の通過儀礼に際して神社仏閣を訪れ、宗教的空間に触れています。年中行事としては、初詣や節分、各種の節句、彼岸等を行なっています。去る4月4日・5日の2日間、六本木ヒルズのハリウッド大学院大学におきまして「伊勢神宮第62回神宮式年遷宮 記録映画上映会」が開催され

ました。700席用意された客席は2日とも満員となり、関心の高さをうかがい知ることができました。およそ1300年前からつづく、20年に1度の伊勢神宮の式年遷宮は、昨年に第62回が挙行され、無事に終了しました。これを行なうために伊勢市民が8年も前から木を切り運ぶ行事(御木曳)を行なうそうで、昔ながらの宮大工、茅葺職人がこの伝統を大切に守り、受け継いでこられました。この伝統により伊勢神宮の社殿がまた新しく再生しました。映像を見ながら感じたことは、「いのち」は宝であり、それをつないでいくことが真の富である、ということです。

林論文も式年遷宮の記録映画も日常生活における宗教的な行動規範や価値観（哲学者J. デューイは宗教を人間生活の中に取り戻そうとしました）に目を向けることの意味をわれわれに問い掛けています。

最後に、第4号の編集過程におきましては、いつもながら河口充勇編集委員の献身的な貢献に負うところであります。また、株式会社あおぞら印刷の立木哲生さんに大変お世話になりました。ここに記して謝意を表します。

『事業承継 Vol.4』編集委員

河口充勇
横澤利昌（委員長）